

船橋市大仲台遺跡

—前原団地建替事業関連埋蔵文化財調査報告書3—

平成20年12月

独立行政法人 都市再生機構
財団法人 千葉県教育振興財団

ふな ばし 船 橋 市 大 仲 台 遺 跡

—前原団地建替事業関連埋蔵文化財調査報告書3—



序 文

財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを目的とし、昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第611集として、独立行政法人都市再生機構千葉地域支社の前原団地建替事業に伴って実施した船橋市大仲台遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、旧石器時代の石器および縄文時代の遺構・遺物が検出されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。この報告書が学術資料として、また地域の歴史解明の資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を始めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成20年12月

財団法人 千葉県教育振興財団
理事長 福島義弘

凡　例

- 1 本書は、独立行政法人都市再生機構による前原団地建替事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、船橋市前原西六丁目670-10ほかに所在する大仲台遺跡（遺跡コード 204-013）である。
- 3 発掘調査から報告書刊行に至る業務は、独立行政法人都市再生機構（住宅・都市整備公団、さらに都市基盤整備公団から名称変更）の委託を受け、財團法人千葉県教育振興財團（旧財團法人千葉県文化財センター）が実施した。
- 4 発掘調査および整理作業の担当者、実施期間は本文中に記載した。
- 5 本書の執筆は、主席研究員兼副所長高橋博文が担当した。
- 6 発掘調査から報告書刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、独立行政法人都市再生機構千葉地域支社及び船橋市教育委員会の御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地図は、下記のとおりである。
第3図 船橋市役所発行 1/2,500 船橋市33-15-16、39-3・4
第4図 国土地理院発行 1/25,000地形図「習志野」(NI-54-19-14-4)
- 8 本書で使用した周辺地形航空写真は、下記のとおりである。
第5図 国土交通省国土地理院による昭和37年撮影のものを使用した。
図版1 京葉測量株式会社による昭和42年撮影のものを使用した。
- 9 本書で使用した座標値は、旧日本測地系に基づく平面直角座標で、図面の方針はすべて座標北である。

本文目次

第1章 はじめに.....	1
第1節 調査の概要.....	1
第2節 遺跡の位置と周辺の環境.....	4
第2章 旧石器時代.....	7
第1節 調査の概要.....	7
第2節 基本層序.....	7
第3節 石器群の分布と遺物.....	8
第3章 縄文時代以降.....	21
第1節 検出された遺構.....	21
第2節 出土遺物.....	22
第4章 まとめ.....	25
報告書抄録.....	卷末

挿図目次

第1図 上層確認トレンチ配置及びグリッド名称	第12図 石器集中4出土状況（器種・石材別）	…13
.....	第13図 石器集中4出土石器	…14
第2図 下層確認グリッド配置及び本調査範囲	第14図 石器集中5出土状況（器種・石材別）	…15
第3図 遺跡位置と周辺地形	第15図 石器集中5出土石器	…16
第4図 大仲台遺跡と周辺の遺跡	第16図 単独石器出土状況（器種・石材別）1	…17
第5図 昭和37年の前原団地周辺	第17図 単独石器出土状況（器種・石材別）2	…18
第6図 基本層序	第18図 単独出土石器	…19
第7図 石器集中1出土状況（器種・石材別）	SK001・SK003	…21
第8図 石器集中1出土石器	SK002	…22
第9図 石器集中2出土状況（器種・石材別）	第21図 縄文時代土器	…22
第10図 石器集中3出土状況（器種・石材別）	第22図 縄文時代石製器	…23
第11図 石器集中3出土石器	第23図 縄文時代土製品	…24

表目次

第1表 発掘調査・整理経過一覧	1 第3表 土器片錐観察表	…24
第2表 旧石器時代石器属性表		…20

図版目次

図版1 遺跡周辺航空写真(1/10,000)	石器集中5遺物出土状況
図版2 上層確認状況(トレンチ2)、 上層確認状況(トレンチ11)、 下層確認状況(トレンチ1)	図版5 石器集中1、石器集中3
図版3 土層断面(10R-45)、 遺物出土状況(10Q-34)、 遺物出土状況(10R-50)	図版6 石器集中4、石器集中5(1)
図版4 石器集中2遺物出土状況、 石器集中4遺物出土状況、	図版7 石器集中5(2)、単独出土石器、 縄文時代石器
	図版8 SK001(土層断面)、SK001、SK003、 SK002、土製品(1)
	図版9 土製品(2)、縄文土器

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査の経緯と経過

前原団地建替事業関連の埋蔵文化財調査は、財團法人千葉県教育振興財團（文化財センター）が、都市基盤整備公団（現独立行政法人都市再生機構）から業務委託を受け継続して実施した。

本書に収録した大仲台遺跡の発掘調査は、平成13年度に開始し、平成20年度まで合計6次にわたり実施された。整理作業は、平成20年度に実施した。発掘調査及び整理作業に係る各年度の組織、担当職員及び作業内容は、下記のとおりである。

第1表 発掘調査・整理経過一覧

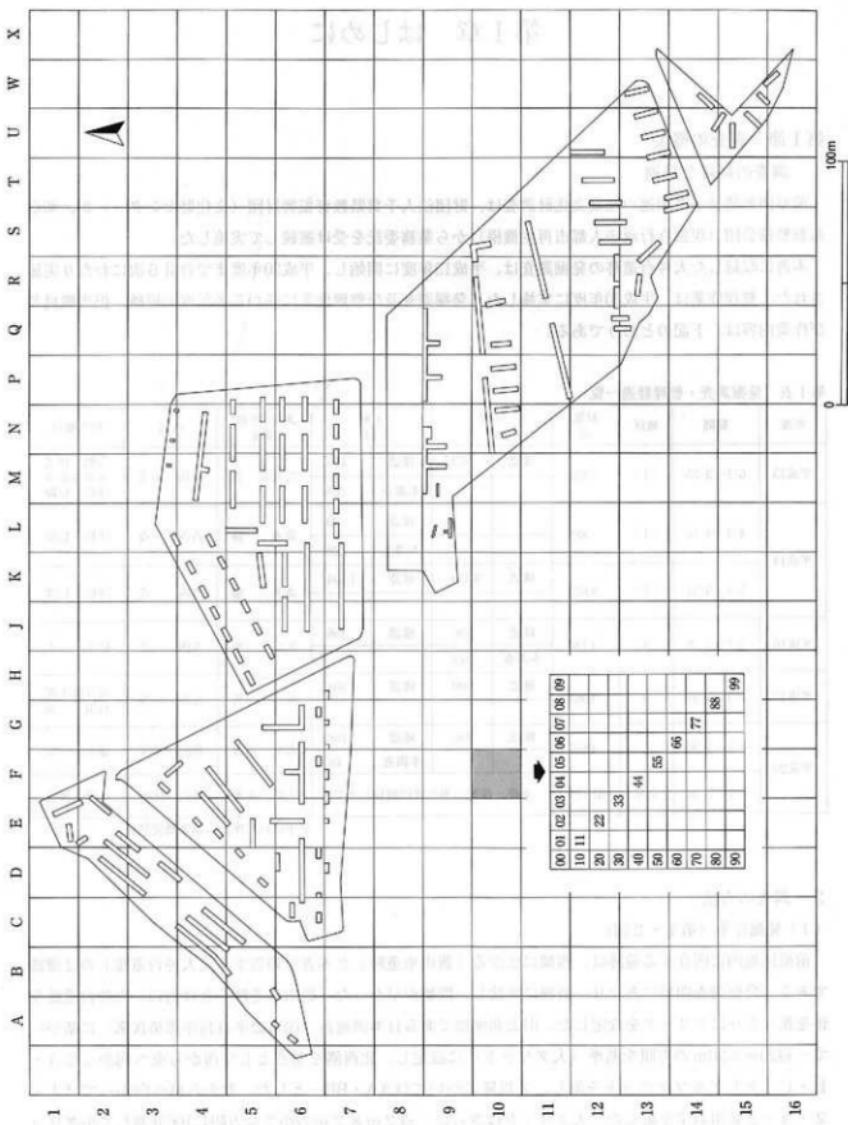
年度	期間	地区	対象 m ²	上層 m ²		下層 m ²		調査(研究) 部長	所長	担当職員
平成13	6/1~3/25	(1)	7,639	確認	573.5	確認	196	佐久間 直	石田 広美	高橋 博文 玉井ゆかり 沖松 信隆
						本調査	268			
平成14	4/4~4/15	(1)	889			確認	30	斎木 勝	古内 茂	沖松 信隆
						本調査	128			
平成16	5/1~5/31	(2)	8,621	確認	3,350	確認	1,404	斎木 勝	古内 茂	沖松 信隆
平成17	3/1~3/28	A	4,180	確認	396	確認	156	矢戸 三男	古内 茂	福生 一夫
				本調査	678					
平成18	4/4~5/31	B	4,984	確認	500	確認	304	矢戸 三男	古内 茂	南宮龍太郎 石川 誠
平成20	5/1~5/30		4,861	確認	480	確認	168	大原 正義	疊田 佳伸	福生 一夫
						本調査	68			
	6/1~7/31	整理	31,174	水洗・注記～報告書印刷刊行まで				大原 正義	疊田 佳伸	高橋 博文

※平成18年度から調査研究部長

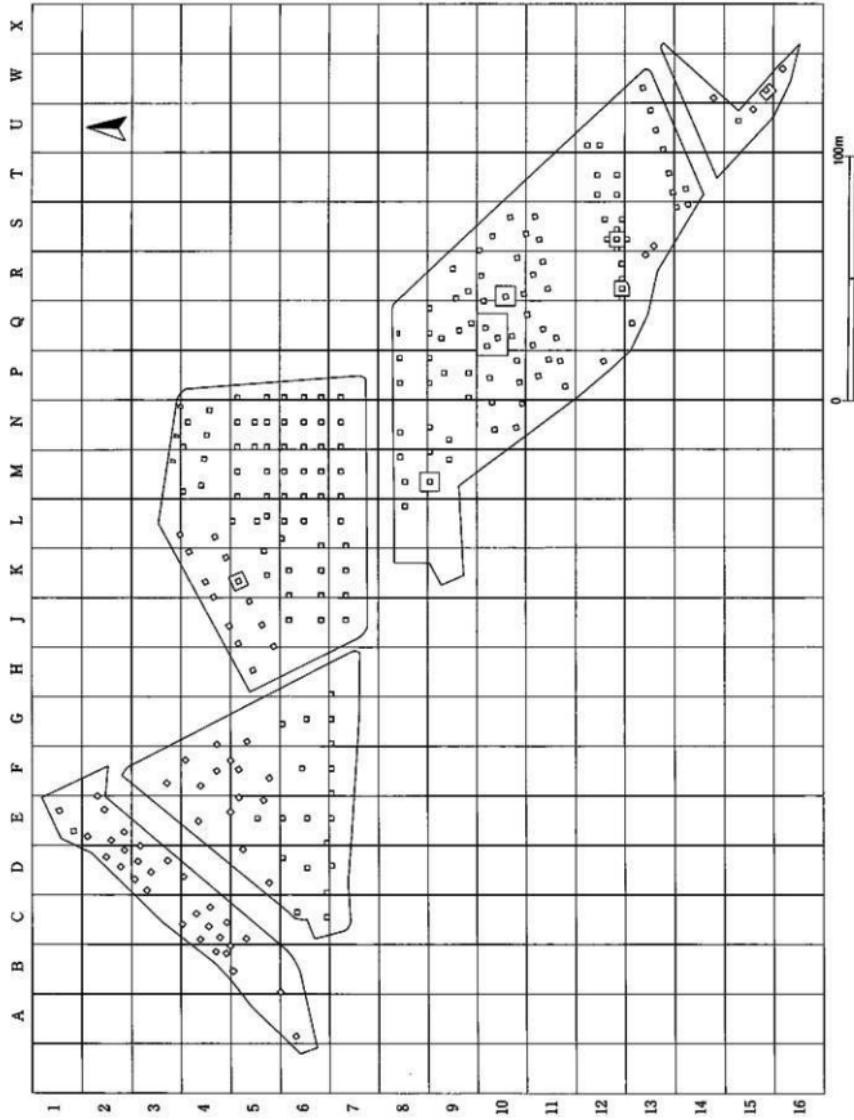
2 調査の方法

(1) 発掘作業 (第1・2図)

前原団地内に所在する遺跡は、西側に広がる「新山東遺跡」と本書で報告する「大仲台遺跡」の2遺跡である。発掘調査開始にあたり、西側に隣接し、開始が早かった「新山東遺跡」とは別に、大仲台遺跡全体を覆うようにグリッドを設定した。旧公共座標である日本測地系（国家標準直角座標標第IX系）に基づいて一辺20m×20mの方眼を基準（大グリッド）に設定し、北西隅を基点として西から東へ向かってA・B・C…とアルファベットを附し、Z以降についてはAA・BB…とした。北から南へ向かっては1・2・3…と算用数字を附した。大グリッドはさらに一辺2m×2mの小さな方眼に100分割して小グリッドとし、大グリッド同様に北西隅を基点に西から東へ向かって00・01・02…、北から南に向かって10・



第1図 上層確認トレンチ配置及びグリッド名称



第2図 下層確認グリッド配置及び本調査範囲

20・30…と呼称する。

発掘調査は、上層については調査対象面積の10%を基本的に幅2mのトレンチを状況に合わせ設定し確認調査を行い、遺構・遺物の分布状況の把握を行い、縄文時代の陥穴2基、中世の土坑1基、時代が不明なピット群、近世の溝状遺構を確認し、必要な部分の拡張調査を実施した。下層については調査対象面積の4%を基本に2m×2mのグリッドを設定し確認調査を行った。その結果、本調査が必要な箇所については確認調査に引き続いて実施した。

(2) 整理作業

整理作業は、すべての調査対象地区の発掘調査が終了した平成20年度に、調査に引き続いて水洗・注記から開始し、原稿執筆・編集を経て本報告書の刊行となった。

第2節 遺跡の位置と周辺の環境

1 遺跡の地理的環境（第3・5図・図版1）

大仲台遺跡が所在する地区は、千葉県の北部に広がる洪積台地である下総台地の南西端附近に位置し標高が20m前後の舌状台地が連続して広がる台地である。本遺跡の立地する台地は、海老川の流れを西に望む東西に長い広大な舌状台地の北東奥の付け根附近、北に向かってまるでコブのように突き出た小さな（舌状の）台地である。台地の直ぐ北側には小支谷を刻んで現前原川が西に向かってながれ、約2.5kmで海老川に合流する。この海老川は、船橋市のはば中央を北から南へ流れいくつもの支流と合流して海老川水系を形成し、現前原川との合流地点から2.5kmほどさらに南へ向かって流れ現在の東京湾最奥部へと注ぐ。東京湾からさほど遠い距離ではない。

現在のJR東日本の総武線津田沼駅から北へ13kmの地点に所在する。また、新京成電鉄前原駅の直ぐ西側に位置する。

2 遺跡周辺の歴史的環境（第4図）

大仲台遺跡の周辺には、縄文時代の遺跡が実際に多く分布している。とくに海老川水系を望む広大な台地には多く、本遺跡の谷を挟んで北西側には「東町・飯山満台遺跡群」が、東側にはすでに報告書が刊行されている同じ台地の「新山東遺跡」を含む「中野木台遺跡群」が、そして谷を挟んだ南西側には「宮本台遺跡群」が連続して所在する。

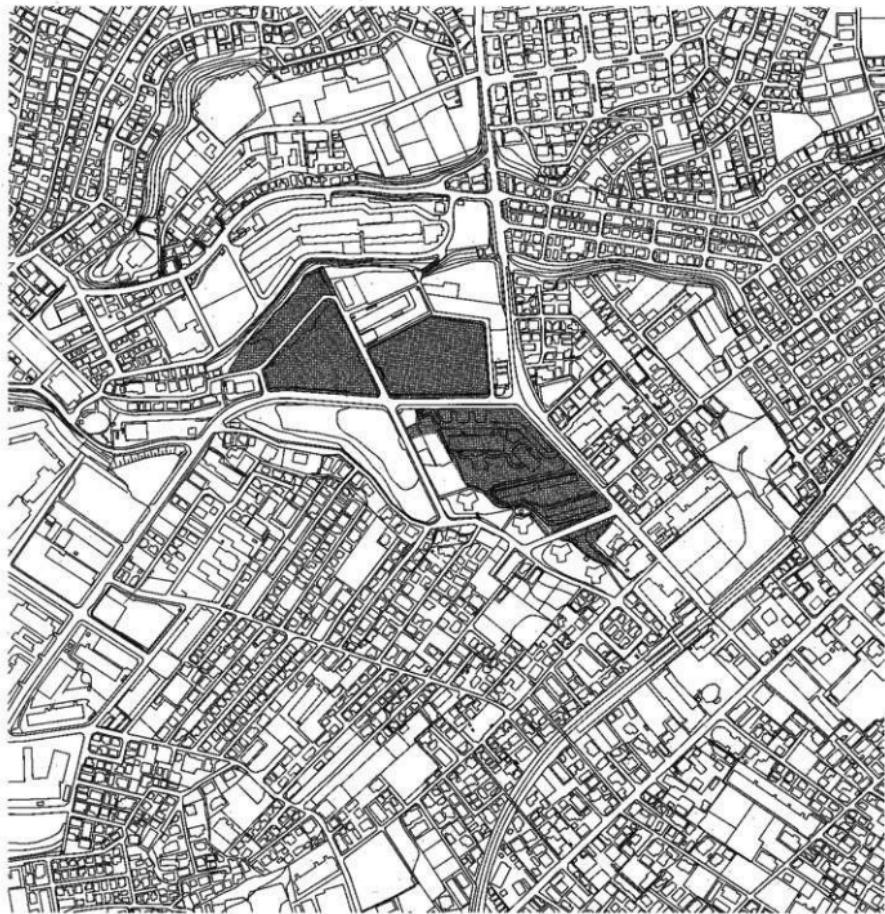
西側には東側と比べると遺跡の数は少ないが多少の距離を置いて遺跡が存在する。縄文時代に限ると貝塚を伴う遺跡が複数散在する。南側は、習志野市と隣接しており若干の距離があるが本遺跡から1.3kmほどのJR東日本津田沼駅すぐ南の台地には著名な『谷津貝塚』が広がる。

（船橋市）

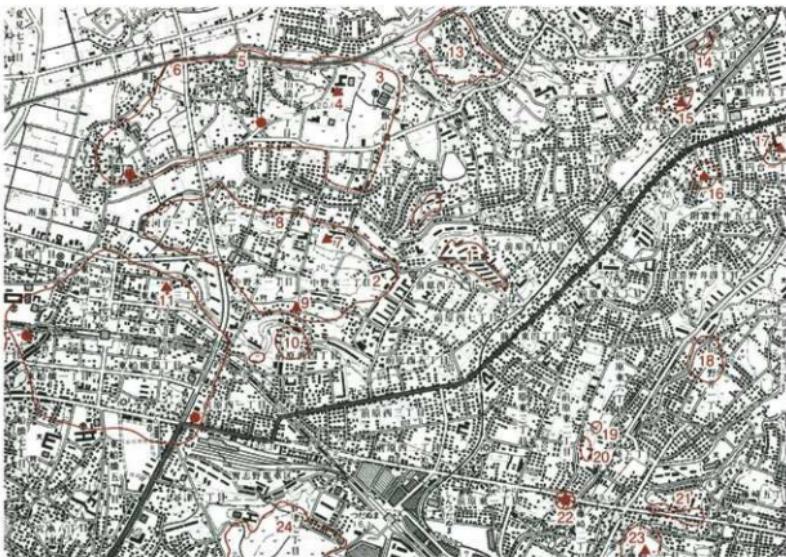
1 大仲台遺跡 2 新山東遺跡 3 飯山満西遺跡 4 上飯山満遺跡 5 子の神遺跡 6 台烟遺跡 7 中野木台遺跡 8 東駿河台遺跡 9 新山遺跡 10 佐倉道南遺跡 11 宮本台遺跡 12 中嶺遺跡 13 ユルギ松遺跡
14 葵園台北遺跡 15 葵園台貝塚 16 滝台貝塚 17 葵園台南貝塚 18 外原遺跡

（習志野市）

19 藤崎3丁目北遺跡 20 藤崎3丁目南遺跡 21 藤崎1丁目遺跡 22 藤崎塚 23 藤崎掘込貝塚 24 谷津貝塚



第3図 遺跡位置と周辺地形 (1/5,000)



第4図 大仲台遺跡と周辺の遺跡 (1/25,000)



第5図 昭和37年の前原閉地周辺 (1/10,000)

第2章 旧石器時代

第1節 調査の概要

平成13年度から平成20年度まで6次にわたる大仲台遺跡の調査のなかで、旧石器時代の石器が検出された地点は単独・複数出土を含めて11地点にのぼる。多くは遺跡の東から南側に集中している。そのうち10点を超える石器群が1地点、5点以上の石器群が4地点、そのほかは2点または単独出土地点で6地点を数える。

第2節 基本層序（第6図・図版3）

本遺跡は、团地建替による発掘調査であるが、表土層からの基本層序の検出は比較的多くの地点で見られた。基本層序として調査区南側から下層確認グリッド9M-48の土層断面を示した。遺跡の立地する台地は、立川ローム層の残りは比較的良好で、東葛地域一般的に見られる層序をほとんどの地点で観察されている。

I層：本来は腐食上層であるが、本遺跡においては团地造成にともない擾乱されている場所がほとんどである。

II層：暗黄褐色土、立川ロームへの漸位層。本来ならば二層に分層が可能だが、擾乱が深くに及び本層が観察されるところは非常に少ない。

※上記2層について基本層序では省いた。

III層：黄褐色土、いわゆるソフトローム層に相当。場所により一部擾乱を受けて観察できない場所がある。本層以下は、ほぼ全域で観察されている。

IV層：明褐色土、硬質ロームである。ソフトロームが入り込んでいることが多く、一断面ではブロックが連続するように見える。

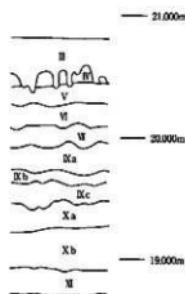
V層：黄褐色土、硬質ロームである。赤色スコリアを含む、微量にガラス質の粒子を含む。武藏野台地での第I黒色帯に相当。

※遺跡のなかで一様にIV層とV層が分層できることはなく明確に分層ができず両層合わせ一層として観察されるか所も結構多く見られる状況にある。

VI層：明黄褐色土、硬質ロームである。始良Tn火山灰(AT)を多く含む。

VII層：褐色土、硬質ロームである。VI層と比べ若干柔らかく赤色スコリアを含む。第II黒色帯の上部に相当。

VIII層：暗褐色土、硬質ロームである。VII層と比べて堆積も厚く色調も黒く、下層に向かって黒さを増す、赤色スコリア・黒色スコリアを多く含む。第II黒色帯下部に相当。本遺跡の多くはIXa・IXcの二層に識別されるが、地点によりVIII層の中央附近に褐色の層があり、IXa・IXb・IXcのVII層に識別される場所が存在する。



第6図 基本層序

IXa層：暗褐色を呈する。赤色スコリア・黒色スコリア

IXb層：褐色を呈する。厚さはそれほどでもない。IXa・IXc層と比べ明るい。

IXc層：IXaと比べて黒い。

X層：黄褐色土、硬質ロームである。スコリアはあまり見られなくなり、IX層と比べても若干ではあるが柔らかい。本来ならば三層に識別されるが、本遺跡ではほとんど一層としてしか識別できない。

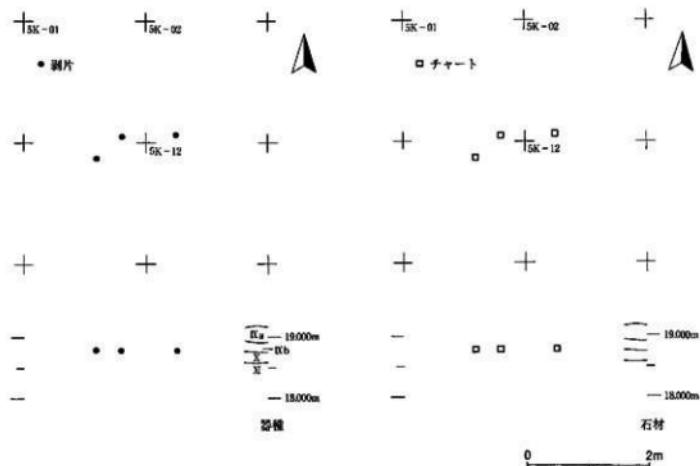
以上、立川ロームを中心として基本層序を述べたわけだが、距離を離れた地点の層序の様相が異なることがあり、特にⅢ層からV層にかけてとIX層の分層状況が大きく変わる。また、立川ローム層の最下層であるX層以下に続く武藏野ローム層の存在は、調査を実施した遺跡全域で確認されている。

第3節 石器群の分布と遺物

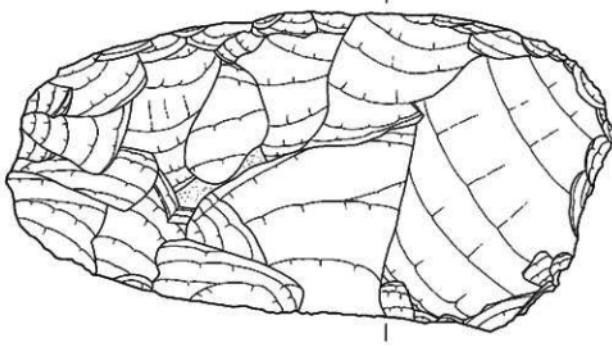
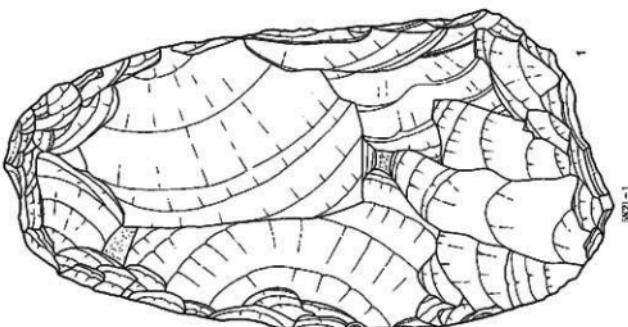
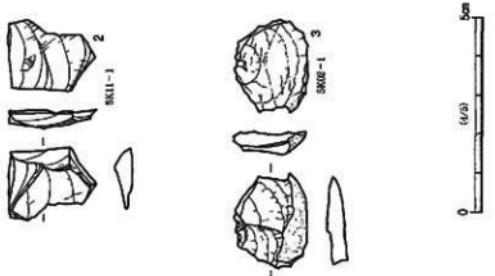
旧石器時代所産の石器の出土地点及び石器点数はそれほど多くはない。分布も遺跡の東側を南に向かって連なるように散在して検出されている。5点以上の石器集中地点が5か所、2点を含む単独出土地点が6か所で石器の総点数は53点を数え、全体として比較的小規模な旧石器時代の遺跡である。最も多くの石器を出土した石器群は遺跡南端に近く、本台地の南側に入り込む浅い谷津を望む台地片口から21点が出土した石器集中5である。以下にその概要を述べる。

1 石器集中地点

これまでの調査の中で、出土した石器総数が53点と少ないが、それでも5点以上の石器が集中して出土した地点は5か所におよぶ、以下にその5か所の石器集中地点について述べることとする。



第7図 石器集中1出土状況（器種・石材別）



第8図 石器集中1出土石器

石器集中1（第7・8図・図版5）

遺跡の北の端近く、グリッド5K-01・02・11・21に展開する総計5点の石器群である。

径3.5mの範囲に分布すると考えられるが、5K-21から出土した位置の特定ができない2点を除くと径1.5mの範囲に残りの石器が分布する。出土層順はIX層下部からX層上部であると考える。

石 材

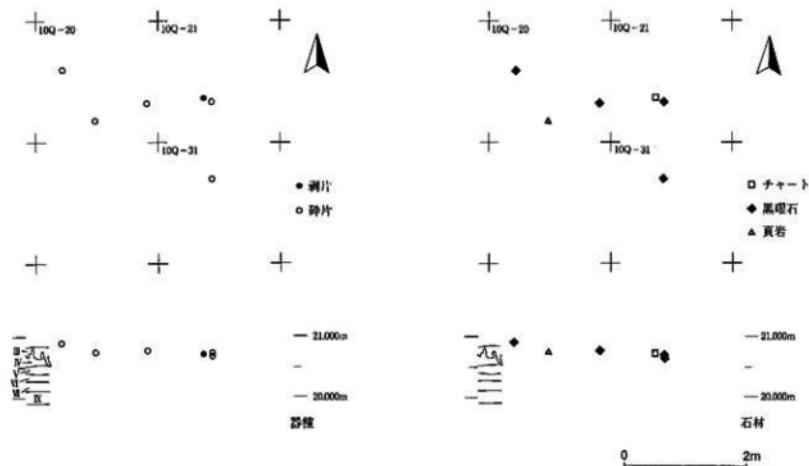
検出された5点の石器のうち4点がチャートで、残る1点は砂岩である。

器 種

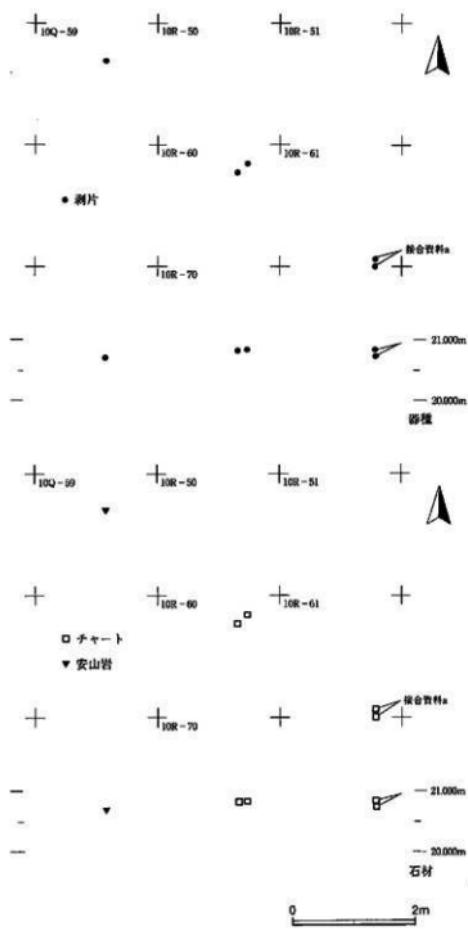
砂岩製の斧形石器1点を除くとすべて剥片である。1は砂岩製の斧形石器である。当該グリッド確認調査中立川ローム層IX層下部から出土した、残念ながら位置の詳細については不明である。形状は刃部へ向かってかすかに開き気味ではあるが横円形を呈する。長さ16.6cm・幅8.2cmを計りかなり大型である。刃部は使用による欠損からか軸に対して偏る。両面両側縁から調整を行い斧形に成形しているが、石器の両面に礫原面がかろうじて残る。2はチャート製の剥片である。縦長の石刃状剥片であろうが、打点部分と先端が欠損している。3はチャート製の礫原面を一部に残す剥片である。

石器集中2（第9図）

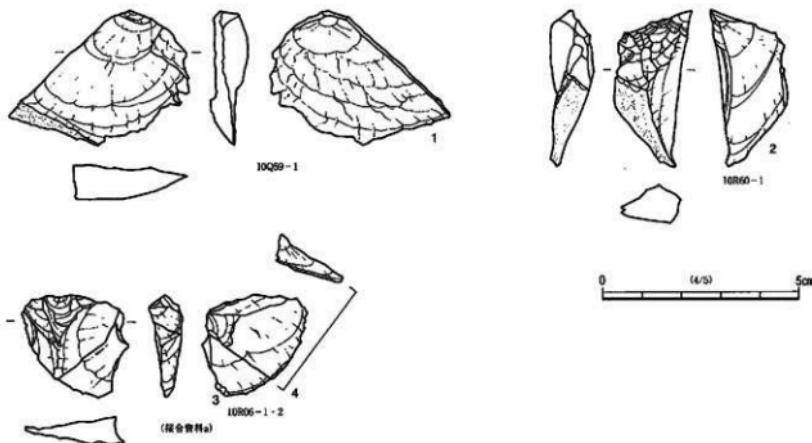
グリッドに10Q-20・21・31に展開する総数6点の石器群である。石器はやや散漫に径3.5mの範囲に分布する。出土層順はIX層である。



第9図 石器集中2出土状況（器種・石材別）



第10図 石器集中3出土状況（器種・石材別）



第11図 石器集中3出土石器

石材

黒曜石が4点、チャートが1点、頁岩が1点である。

器種

2点が剥片、残る4点が碎片である。接合もなく剥片の2点も含め、出土した石器の最大長が10mm以下であり、図示を省略した。

石器集中3（第10・11図・図版5）

グリッド10Q-59・10R-60・61に展開する総数5点の石器群である。北西から南東にはほぼ直線的に約6mの範囲に散在する石器群である。出土層順はIV層～V層である。

石材

黒色安山岩が1点、残りの4点はチャートである。

器種

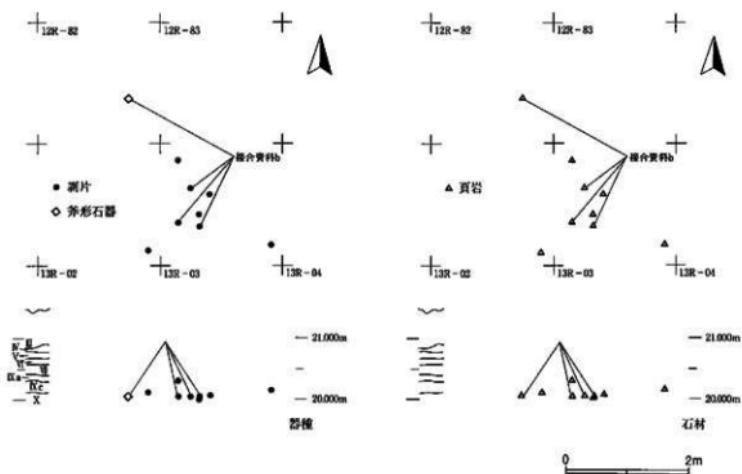
1～4すべて剥片である。1は黒色安山岩製の一部に礫原面を残す横長の剥片である。2はチャート製の一部に礫原面を残す縦長の剥片である。3・4は接合資料である。大きな剥片から一部が折れ、剥がれたようである。

石器集中4（第12・13図・図版6）

グリッド12R-82・92・93に展開する総数9点の石器群である。径35mの範囲に広がる石器群である。出土層順の中心はIV層下部である。

石材

すべて同一母岩の頁岩である。



第12図 石器集中4出土状況（器種・石材別）

器種

斧形石器の1点を除くとほかはすべて剥片である。

1は斧形石器片である。全体の40%ほどが残存、器形は格円を呈すると考える。長軸端部に鋭利な調整を加えており刃部と見なし図示したが、左右対称とは言い難く詳細は不明である。剥片が3片接合する。2は横長の剥片である。1と接合する。3点のなかでは最も早く剥離されている。3は縦長の剥片である。1と接合する。3点のなかでは2番目に剥離されている。4は横長の剥片である。1と接合する。5は縦長剥片と考えるが打面を欠損する。6は縦長の稜を持つやや厚めの剥片である。

石器集中5（第14図・図版6・7）

グリッド12S-72・73・82・83に展開する総数21点の石器群である。グリッド12S-72の1点から南東方向にやや距離を置いて径3mの範囲に残りの石器はまとまって出土している。出土層順はⅣ層～Ⅸ層で、所謂第Ⅱ黒色帯の全域にわたる。

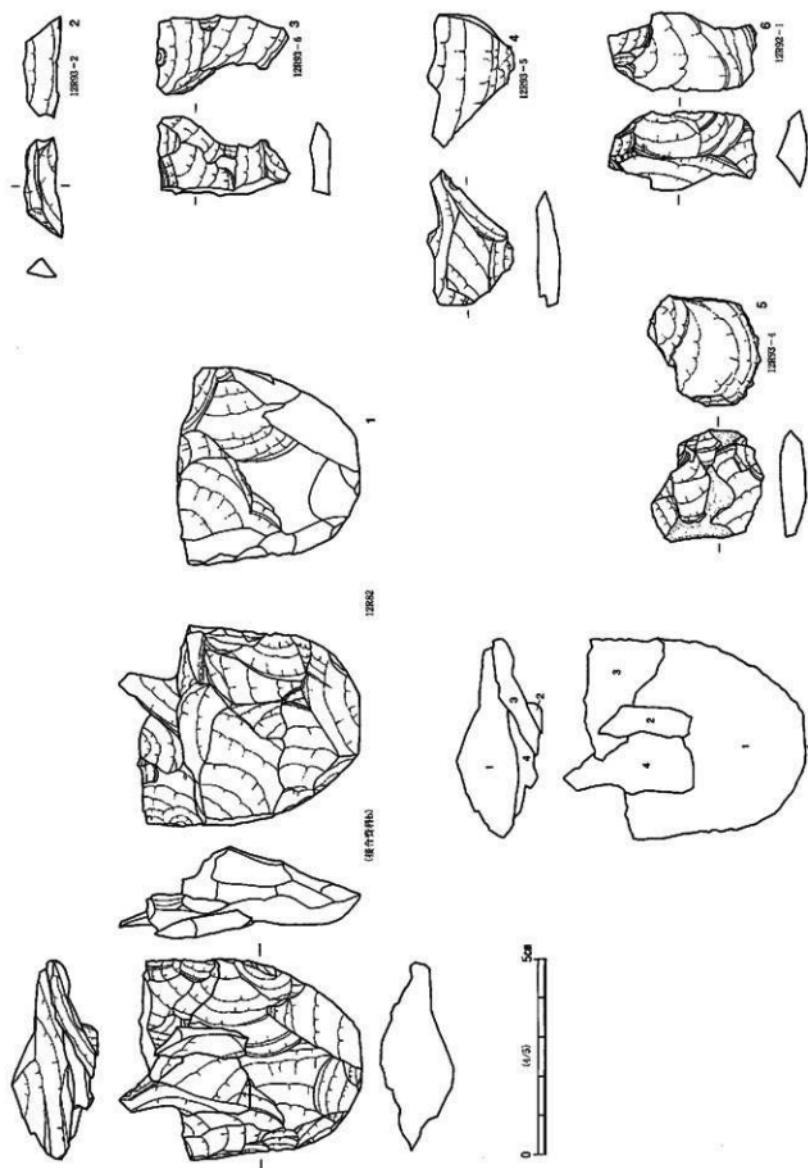
石材

黒曜石が6点、頁岩が15点である。

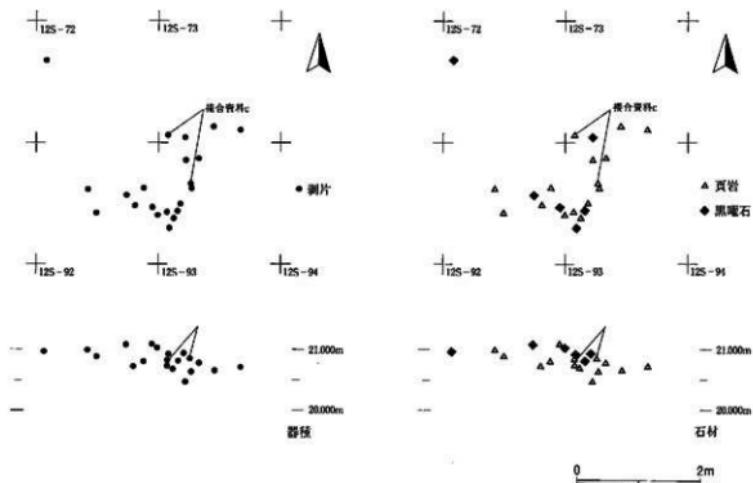
器種

4のナイフ形石器、1の使用痕のある剥片の2点以外はすべて剥片である。

1は茶褐色を呈する頁岩製の剥片である。打面の背面側には細かな打撃痕が見える。また、切断面の腹面側には切断後に使用した結果、小さな連続する剥離が見られる。2は茶褐色を呈する頁岩製の剥片であ



第13図 石器集中4出土石器



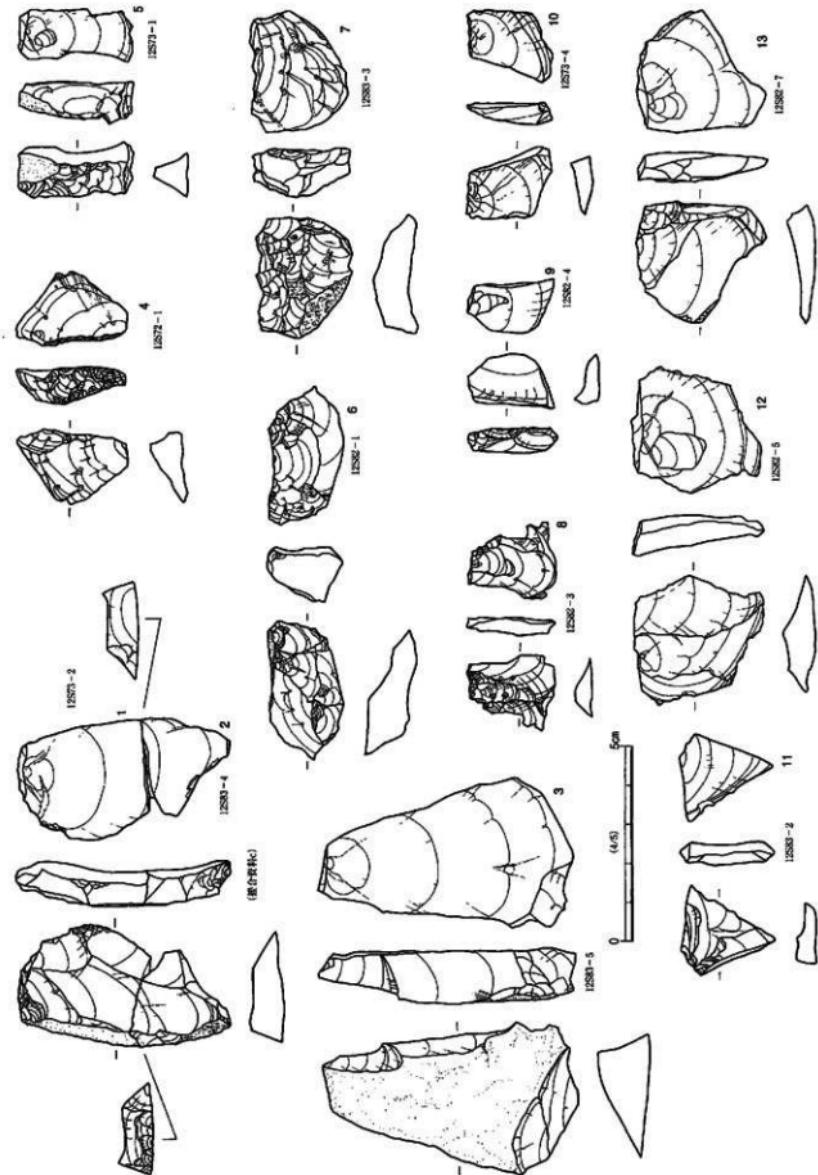
第14図 石器集中5出土状況（器種・石材別）

る。先端部附近には腹面側からの打撃による細かな剥離が見られる。1と2は接合する（接合資料c）。本来は平坦打面を残し一部に疊原面を有する継長の剥片である。長軸中央やや下部で腹面からの加圧により切断している。接合した状態の長軸上の両端に細かく重なる剥離痕が観察される。切断される前に使用されていた痕跡と考える。3は頁岩製の継長剥片である。剥片背面に疊原面を多く残す。4は黒曜石製のナイフ形石器である。基部には片側に両面から調整が加えられている。残念ながら刃部を含む上半部は製作途中で切断し欠損してしまったようである。5は黒曜石の厚みのある剥片である。末端は残っておらず下半は折れたと思われる。6は一部に原面を残す黒曜石の剥片である。平坦な原面も含み打面の位置を頻繁に変え、剥片を取ったような痕跡があり残核か。7は疊原面を一部に残す剥片である。8は黒曜石の剥片である。9は頁岩製の剥片である。打面に原面を残す。中央付近で左右に折れている。10は頁岩製の剥片である。打撃が弱く先端部が厚く残ってしまっている。11は頁岩製の剥片である。基部側と先端側と少なくとも3片に切断されている一片である。12は頁岩の剥片である。9~12は同一母岩であるが、残念ながら接合しない。13は頁岩製の剥片である。一部に疊原面を残す。

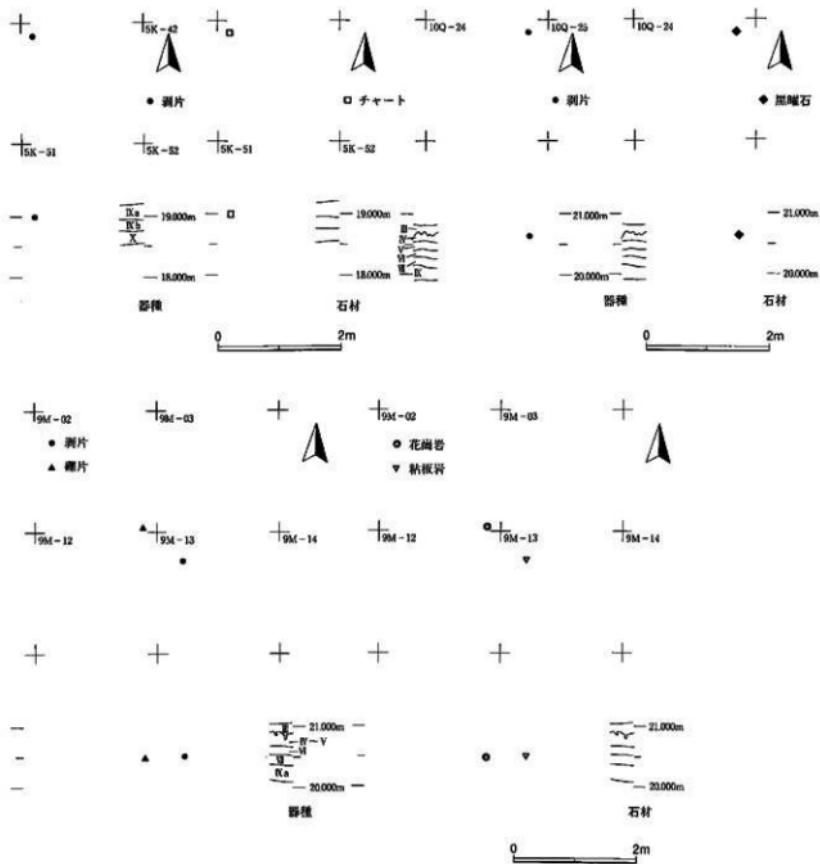
2 単独出土（第16~18図・図版7）

ここでは、旧石器時代の所産でかつ2点以下または単独で出土した石器をまとめたものである。出土状況は第16図と第17図に示したとおりであるが、すべての石器を図示しているわけではない。

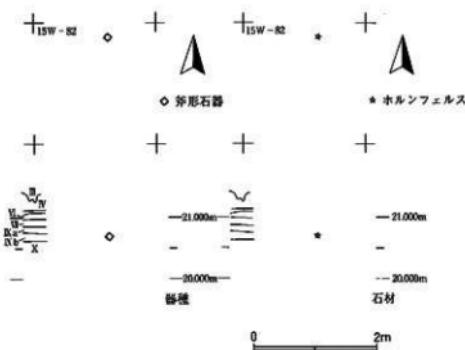
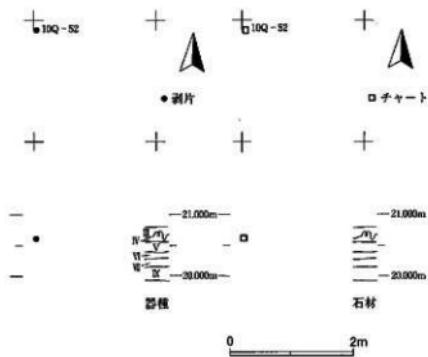
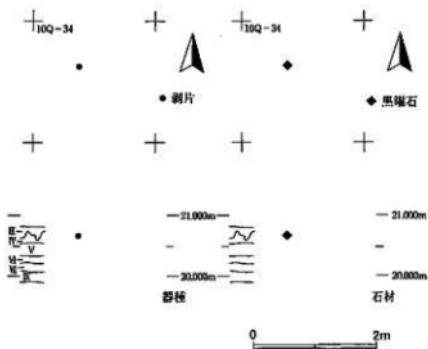
1はグリッド5K-41から検出された石器である。チャート製の石刃状の剥片である。打面は欠損している。出土層順はIXa層中である。2はグリッド9M-13から検出された粘板岩製の小剥片である。打面は



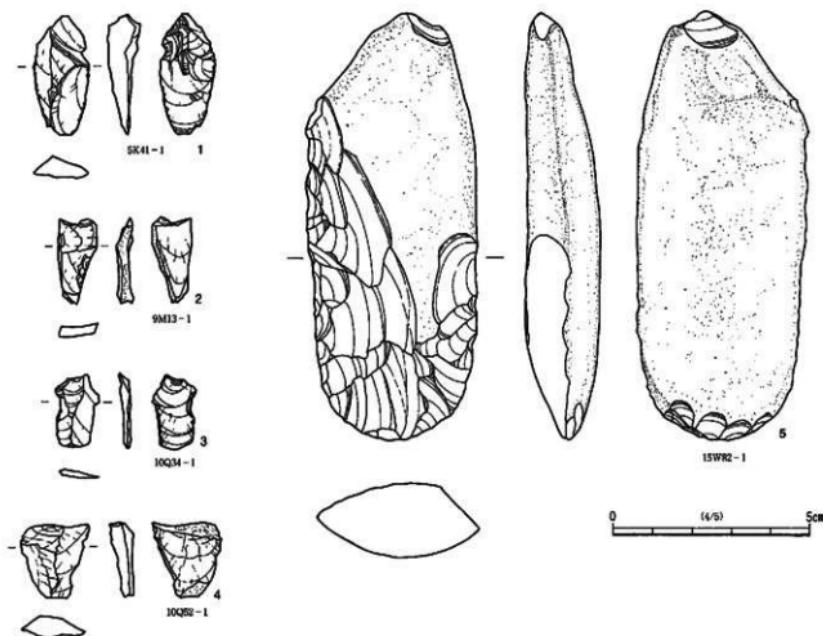
第15図 石器集中5出土石器



第16図 単独石器出土状況（器種・石材別）1



第17図 単独石器出土状況（器種・石材別）2



第18図 単独出土石器

欠損している。出土層順はⅦ層中である。なお、検出された2点のうち9M-02から検出された花崗斑岩の礫片であり、図示していない。3はグリッド10Q-34から検出された石器である。黒曜石製の縦長剥片である。腹面の両縁には背面より調整が加えられている。打面は観察できない。出土はⅢ層～Ⅳ層である。4はグリッド10Q-52から検出された石器である。チャート製の剥片である。打面は観察できない。出土はⅢ層～Ⅳ層である。5はグリッド15W-82から検出された石器である。ホルンフェルス製の斧形石器である。出土層順はⅤ層下部である。素材は、それほど厚くない扁平な礫をそのまま利用し刃部および側縁を作り出し斧形石器としている。両側縁は片側一方に多くの調整加工が加えられている。片側が一方より長く打撃を加えているのは、斧形石器としての形状を作り出すために余分な部分を取り除くためと考えられる。刃部は両方向から打撃を加えより鋭利に作り出している。刃部附近の研磨は見られない。

第2表 旧石器時代石器属性表

石器 集中 グリップ	遺物番号 番号	標高(m)	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	接合番号	備 考
					mm	mm	mm	g		
1	5K-01	0001	18.770	剥片	チャート	14.60	11.70	3.10	0.48	
1	5K-02	0001	18.766	剥片	チャート	19.30	24.30	6.00	2.51	第8図-3
1	5K-11	0001	18.808	剥片	チャート	22.20	18.90	4.50	1.63	第8図-2
1	5K-21	0001	—	斧形石器	砂岩	165.55	81.45	31.60	400.85	第8図-1
1	5K-21	0002	—	剥片	チャート	12.10	17.10	2.25	0.35	
2	10Q-20	0001	20.769	碎片	黒曜石	9.25	3.70	2.95	0.10	
2	10Q-21	0001	20.703	剥片	チャート	10.35	9.35	2.90	0.38	
2	10Q-24	0001	20.651	剥片	黒曜石	12.75	7.10	2.25	0.22	
2	10Q-29	0002	20.725	碎片	頁岩	5.50	5.30	2.05	0.05	
2	10Q-21	0002	20.725	碎片	黒曜石	6.20	9.80	1.30	0.03	
2	10Q-20	0003	20.882	碎片	黒曜石	3.15	6.50	4.65	0.30	
3	10Q-59	0001	20.700	剥片	黑色安山岩	34.70	46.60	10.00	10.04	第11図-1
3	10R-60	0001	20.820	剥片	チャート	40.40	19.80	11.00	5.80	
3	10R-60	0002	20.808	剥片	チャート	10.35	4.55	2.40	0.16	第11図-2
3	10R-61	0001	20.740	剥片	チャート	19.90	17.45	8.10	1.16	第11図-3
3	10R-61	0002	20.815	剥片	チャート	25.00	25.00	8.70	3.52	第11図-4
4	12R-82	0001	20.058	斧形石器	頁岩	47.60	52.55	18.60	45.23	第13図-1
4	12R-92	0001	20.130	剥片	頁岩	37.75	20.00	8.80	6.14	第13図-6
4	12R-93	0001	20.308	剥片	頁岩	16.15	18.60	7.00	2.58	
4	12R-93	0002	20.056	剥片	頁岩	9.30	26.35	4.65	1.12	第13図-2
4	12R-93	0003	20.068	剥片	頁岩	11.05	11.90	1.95	0.32	
4	12R-93	0004	20.013	剥片	頁岩	31.05	28.50	6.10	5.49	第13図-5
4	12R-93	0005	20.037	剥片	頁岩	21.55	35.20	5.85	4.35	第13図-4
4	12R-93	0006	20.050	剥片	頁岩	33.55	21.00	6.30	3.82	第13図-3
4	12R-93	0007	20.142	剥片	頁岩	25.75	17.25	4.90	1.68	
5	12S-72	0001	20.848	ナイフ形石器	黒曜石	22.30	23.90	9.50	3.34	第15図-8
5	12S-73	0001	20.848	剥片	黒曜石	28.80	12.90	11.10	3.54	第15図-7
5	12S-73	0002	20.760	使用痕ある剥片	頁岩	32.75	29.75	9.50	11.56	第15図-1
5	12S-73	0003	20.638	剥片	頁岩	5.30	20.85	3.15	0.32	
5	12S-73	0004	20.710	剥片	頁岩	21.90	19.00	5.90	1.98	第15図-10
5	12S-82	0001	21.093	剥片	黒曜石	18.70	35.20	14.20	6.34	第15図-4
5	12S-82	0002	21.030	剥片	頁岩	9.00	9.80	3.25	0.27	
5	12S-82	0003	21.065	剥片	黒曜石	22.30	19.20	4.80	8.25	第15図-6
5	12S-82	0004	20.987	剥片	頁岩	22.40	14.00	5.90	1.81	第15図-9
5	12S-82	0005	20.885	剥片	頁岩	33.30	32.80	10.20	6.45	第15図-12
5	12S-82	0006	20.810	剥片	頁岩	21.10	12.60	2.90	0.62	
5	12S-82	0007	20.727	剥片	頁岩	33.20	31.40	7.60	6.92	第15図-13
5	12S-83	0001	20.925	剥片	黒曜石	10.25	5.30	1.30	0.08	
5	12S-83	0002	20.828	剥片	頁岩	24.20	22.90	6.10	2.25	第15図-11
5	12S-83	0003	20.807	剥片	黒曜石	24.40	30.80	12.40	8.29	第15図-5
5	12S-83	0004	20.839	剥片	頁岩	26.65	26.25	8.90	5.49	第15図-2
5	12S-83	0005	20.760	剥片	頁岩	65.40	39.00	14.20	31.02	第15図-3
5	12S-83	0006	20.790	剥片	頁岩	9.65	16.65	1.95	0.31	
5	12S-83	0007	20.638	剥片	頁岩	15.00	19.65	11.60	1.49	
5	12S-83	0008	20.680	剥片	頁岩	22.90	21.85	4.25	0.98	
5	12S-83	0009	20.471	剥片	頁岩	9.65	15.30	5.25	0.51	
單	10Q-31	0001	20.698	碎片	黒曜石	5.25	8.00	2.55	0.12	
單	10Q-34	0001	20.667	二次加工剥片	黒曜石	19.20	11.40	3.90	0.33	第18図-3
單	10Q-52	0001	20.628	剥片	チャート	18.90	17.40	6.20	1.62	第18図-4
單	15W-82	0001	20.686	斧形石器	ホルンフェルス	109.95	43.45	18.30	119.16	第18図-5
單	5K-41	0001	19.009	剥片	チャート	31.00	14.10	8.00	2.15	第18図-1
單	9M-02	0001	20.475	剥片	花崗岩	—	—	—	2.12	
單	9M-13	0001	20.505	剥片	粘板岩	20.00	10.10	4.00	0.69	第18図-2

第3章 繩文時代以降

第1節 検出された遺構

ここでは、平成13年度から平成20年度まで6次にわたる大仲台遺跡の調査のなかで、縄文時代以降の時代から検出された遺構についてまとめる。縄文時代の陥穴が2基、中世の土坑1基が検出され、ほかには、時代が不明なピット群、近世の溝状遺構が複数確認されたのみである。ここでは近世以前で時代・時期が明確な遺構について報告することとする。(遺構の呼称は検出時の呼称をそのまま使用している。)

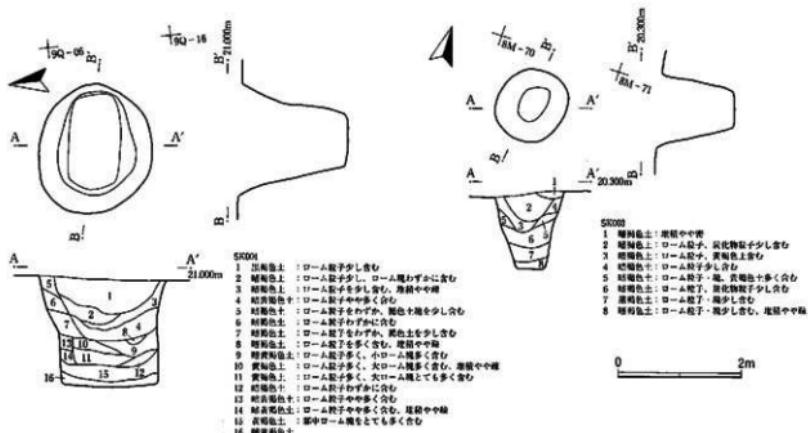
1 縄文時代

SK001 (第19図・図版8)

グリッド9Q-06に位置する。平面形状は長径2.1m、短径1.9mの卵形を呈する陥穴である。確認面からの彫り込みは1.8mを測る。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がるが、中程から開口部に向かって緩やかに広がる。底面は平坦で、ピット等の施設はない。遺物の出土はない。時期は形状等から判断すると縄文早期と考える。

SK003 (第19図・図版8)

グリッド8M-70に位置する。平面形状は長径1.2m、短径1.1mの円に近い梢円を呈する陥穴である。確認面からの彫り込みは1.3mを測る。壁は底部から開口部に向かって緩やかに開く。底面は平坦で、ピット等の施設はない。遺物の出土はない。時期は形状等から判断すると縄文早期と考える。



第19図 SK001・SK003

2 繩文時代以降

SK002 (第20図・図版8)

グリッド9N-13・14に位置する。長径1.3m、短径1.1mの不正円形を呈する円形の土坑である。確認面からの彫り込みは0.35mとやや浅い。底部は、中央に向かってややくぼみ断面は鍋底状を呈する。遺物の出土はない。時代は中世以前と考えられる。

第2節 出土遺物

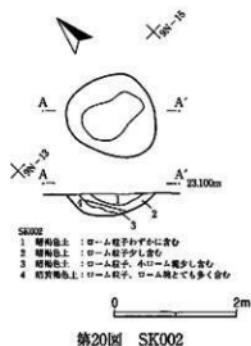
6次にわたる調査の中で、出土した遺物は近世のものを除くと非常に少ない。前述のとおり遺構にともなう遺物は皆無であったが、調査の過程で出土した特徴的な遺物について以下に報告する。

1 繩文時代

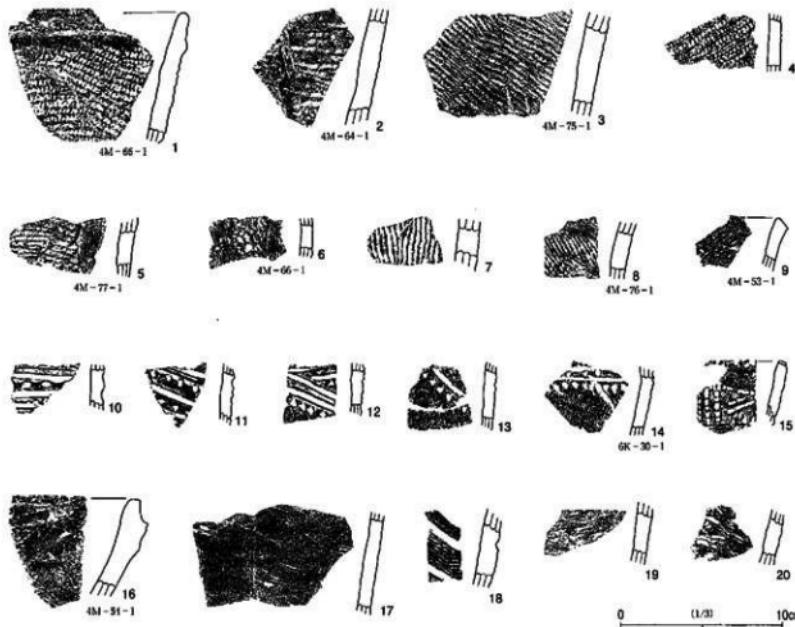
検出した縄文時代早期の遺構に伴う時期の遺物は出土しなかったものの、西に小谷を挟んで隣接する新山東遺跡の影響か縄文時代中期の遺物が少なからず出土している。

(1) 繩文土器 (第21図・図版9)

出土した縄文土器は確認調査時に出土したものである。時期的には中期後半を中心で、中期前半、早期



第20図 SK002



第21図 縄文時代土器

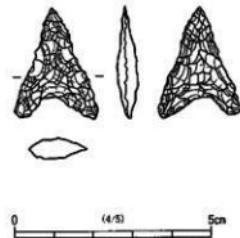
の燃り糸紋系の土器が若干出土している。以下に代表的なものを示しその概要を述べる。

1～9は器面に縄文が施されているものである。1は深鉢の口縁部附近である。口縁部以下に無紋帶が巡り、その直下にわずかな高まりの隆帯が横走る以下には縄文のみが施されている。2～4・7は深鉢形土器の胴部の破片である、縄文のみが施されている。5は深鉢の胴部の破片である。地紋である縄文を磨り消して無紋帶を縦方向に施している。6は深鉢の胴部破片である。5と同様に地紋である縄文を磨り消して無紋帶を縦方向にあまり間をおかず平行して施している。8は胴部の破片である。地紋である縄文を磨り消して無紋帶をこの部位では上側横方向に施している。9は深鉢の口縁部附近である。無紋の口縁部の直下にわずかに稜を持ち以下胴部には縄文のみが施されている。10～15は深鉢の胴部破片である。地は無紋で、器面をヘラ状工具等で平行沈線を描き並ぶように棒状の先端を連続刺突して文様を施している。14を除きほかは同一個体である。16は無紋の深鉢土器の口縁部附近である。口縁から斜めに平行する隆帯を施している。17は深鉢の無紋の胴部破片である。18～20は深鉢の胴部破片である。いずれも燃り糸紋を施している。18は地紋の燃り糸紋の上から燃り糸紋を帯状に残しながら平行に棒状工具により沈線を加え、その外側には無紋帶を施している。以上縄文時代の土器について述べたが、1～9・16・17は縄文時代中期後半の土器群である。10～15は縄文時代中期前半の土器群と考える。18～20は早期の土器群である。

(2) 石製品 (第22図・図版7)

平成17年度の調査でトレンチ内から縄文時代中期の所産と考えられる石鎌が1点出土したのみである。

形状は二等辺三角形を呈している、底部には抉りを比較的深く入れ脚を作り出している。無茎石鎌に分類できる。脚の一方の先端がほんのわずかに欠損している。石材はチャートである。大きさは現存値で、長さ28.5mm、幅21.4mm、厚さ5.4mmを計る。



第22図 縄文時代石製器

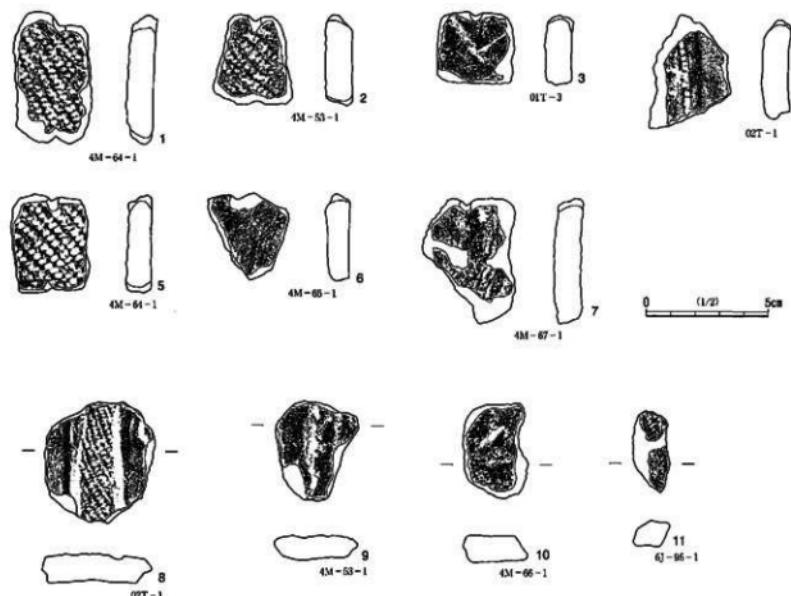
(3) 土製品 (第23図・図版8)

本遺跡からは数少ないが縄文時代の土製品が出土している、いずれも土器の破片を利用して作られた土器片錐及び土製円盤である。以下に報告する。

1～7は土器片錐である。すべてについて以下の条件の下計測した。長軸を一対(2か所)の切り込みを結ぶ方向とし、短軸は長軸に直交する軸とする。破片または切り込みが1か所しか確認できないものについては現存する部位の計測を行った。結果は第3表に示したとおりである。完形品の3個体(1・2・5)を観察すると基本的に長方形の土器破片に成形を加えて土器片錐としている。残るこれら以外の土器片錐4点も基本的には同様に作られたと考えられる。次に土器片錐が完形土器の正位置に対して長軸が口縁に対して平行な関係にあるものを「I類」、直交の位置関係にあるものを「II類」、I・IIに分類できないものを「III類」として分類した。成形であるが、4を除くほかの6点については土器断面部分に調整を加え、全体的に凸を消すように形を整えている。これら土器片錐に使われた土器の時期については、中期頭と思われる4を除くほかは縄文時代中期後半の加曾利Ⅱ式である。

8～11は土製円盤である。8はほぼ完形品であるが、残り3点は欠損品である。いずれも土器の胴部破片を用い、断面部分に調整を加え形状を丸く整えている。本製品の時期も土器片錐の大半と同様縄文時代

中期後半の加曾利Ⅱ式期である。なお完形の土製円盤である8の計測値は以下のとおりである。長さ・幅ともに49.2mm、厚さ11mmである。



第23図 細文時代土製品

第3表 土器片鑑観察表

博団番号	出土地点	遺構種類	時 期	長軸長cm	短軸長cm	長短比	重量g	部位	分類	備 考
第23図-1	4M-64	グリッド	加曾利EⅡ	5.47	3.20	0.59	22.35	肩部	Ⅱ	
第23図-2	4M-53	グリッド	加曾利EⅡ	3.72	3.14	0.84	14.26	肩部	Ⅱ	1と同一個体?
第23図-3	01T	トレンチ	加曾利EⅡ	(2.88)	(3.19)	1.11	13.48	肩部	I	
第23図-4	02T	トレンチ	阿玉台	(4.65)	(3.46)	0.74	14.52	口縁部	I	
第23図-5	4M-64	グリッド	加曾利EⅡ	4.00	3.08	0.77	17.01	肩部	Ⅱ	
第23図-6	4M-65	グリッド	加曾利EⅡ	(3.35)	(3.27)	0.98	12.08	口縁部	I	
第23図-7	4M-67	グリッド	加曾利EⅡ	(5.21)	(3.86)	0.74	22.27	肩部	I	

2 細文時代以降

確認調査で検出した近世の溝覆土からは近世陶磁器の破片を中心に、素焼きの泥メンコ・土製の基石・人形の雁首等、泥製の玩具が少なからず出土している。

第4章　まとめ

6次にわたる大仲台遺跡の発掘調査では、旧石器時代の遺構・遺物を中心として、縄文時代及び中世の土坑・近世の溝も数条検出されている。ここでは、本遺跡の中心を占める旧石器時代について述べてまとめてみたい。

本遺跡の立地する台地は、東西に長い広大な舌状台地の奥、台地にコブのように貼り付く北側に小支谷を望み、南側にはさらに小さい谷が入り込む狭小な台地である。この台地中ほどを北西から南東に並ぶよう遺物が検出されている。出土遺物のほとんどは剥片及び碎片である。石器といえるのは打製の斧形石器3点ぐらいである。出土点数が少ない遺物のなかで、その出土の状況など異なる3点の斧形石器には注目されたい。

斧形石器1（第8図1）

石器集中1に属するが、残念ながら出土位置の詳細について特定ができない。出土のおおよその位置と産出層順は出土状況から石器集中1のほかの石器と同一層順と考える。つまり立川ローム層IX層（第II黒色帯）最下部である。長さ16.6cm、幅8.2cm、厚さ3.1cmを計り今回出土した石器では最も大きい。形状は刃部に向かってやや広がり撥形を示すが、全体としては楕円形を呈する。礫原面を石器の極一部に残しており、そこから推測するとやや厚めではあるが扁平な大きめな礫の両面両側縁に大胆な打撃を加えて剥離調整し、斧形石器の形状を整えている。刃部の一部は使用による欠損と考えるが、ほぼ原形をとどめての出土である。

斧形石器2（第13図1）

石器集中4に属する。出土点数は少ないが本群はすべて同一石材の石器群である。出土層順は立川ローム層IX層（第II黒色帯）の最下部である。出土した斧形石器は大半が欠損しており、刃部と思われる一部のみの出土である。両面両側縁に調整を加えていることから素材は相当厚みのある石材と考える。本石器の厚みも大きさから見るとやや厚い。また、現存から推測すると本来の長さは約12cm、幅は5cm超と考えられ、斧形石器1には及ばないものの大きい方の部類であろう。注目は、この石器片に同じ石器群から出土した剥片が3点接合することである。同一石材の石器群から考えると当然ではあるのだが、本体のどこかに欠損が生じて再生を行ったものなのか、新たに剥片を作り出そうとしていたのか、石器の残り半分の出土がなかったことと合わせ詳細は分からぬ。また、出土したすべての剥片が接合しないのも残念である。

斧形石器3（第18図5）

グリッド15W-82から単独で出土した斧形石器である。出土層順は立川ローム層IX層（第II黒色帯）最下部からの出土である。狭長で扁平な礫をほぼ片面からの打撃により刃部を作り出しており、礫原面がほか2点の斧形石器と比べてとても多く残る石器である。また、調整が両側縁不均衡なのは、大きく剥離した方の礫形状がやや張り出し石斧の形状には取り除く必要があったと考える。刃部附近のみ両側から調整を行って鋭利な刃部を作っている。なお、刃部附近に磨きの痕跡は見られない。

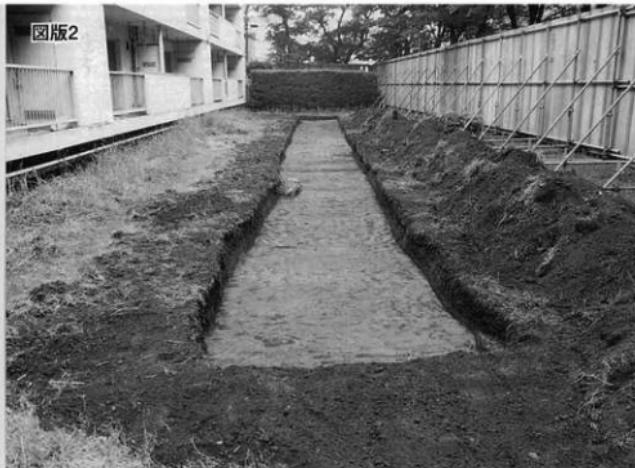
以上、大仲台遺跡立川ローム層IX層下部から出土した斧形石器3点について概要を述べてみたが、ほぼ

同一層（時期）にもかかわらず、その石材、形態、作られ方、使われ方、再加工の有無、破棄されるに至った経緯（検出時の状態）など三者三様の星をなしている。また、下総台地では比較的出土の数が多いとされる刃（局）部磨製はなく、素材を打ち欠くだけの斧形石器のみの出土であった。斧形石器資料の増加にともない近年あらためて様々な視点からの研究も盛んなようだが、まだまだ使用目的なども含め詳細な点については不明なところも多い。今回出土したこれら3点の斧形石器が微力ながら諸研究の一助になることを期待したい。

写 真 図 版



遺跡周辺航空写真 (1/10,000)



上層確認状況（トレンチ2）



上層確認状況（トレンチ11）



下層確認状況（トレンチ1）



土層断面（10R-45）



遺物出土状況（10Q-34）



遺物出土状況（10R-50）



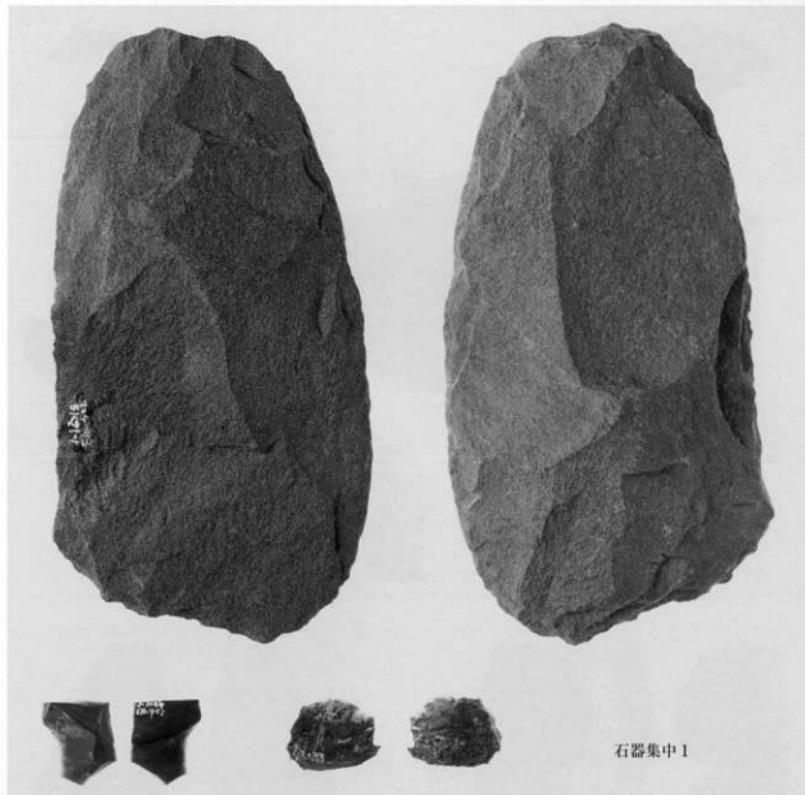
石器集中2遺物出土状況

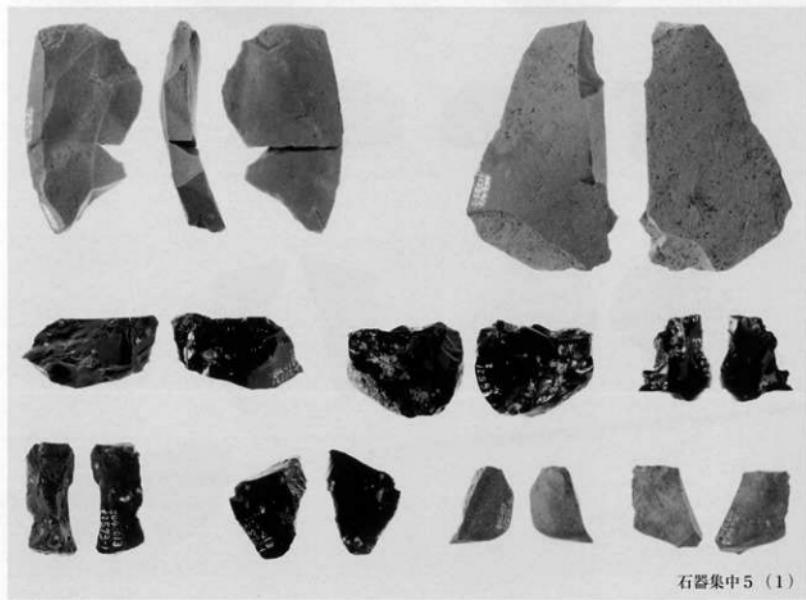
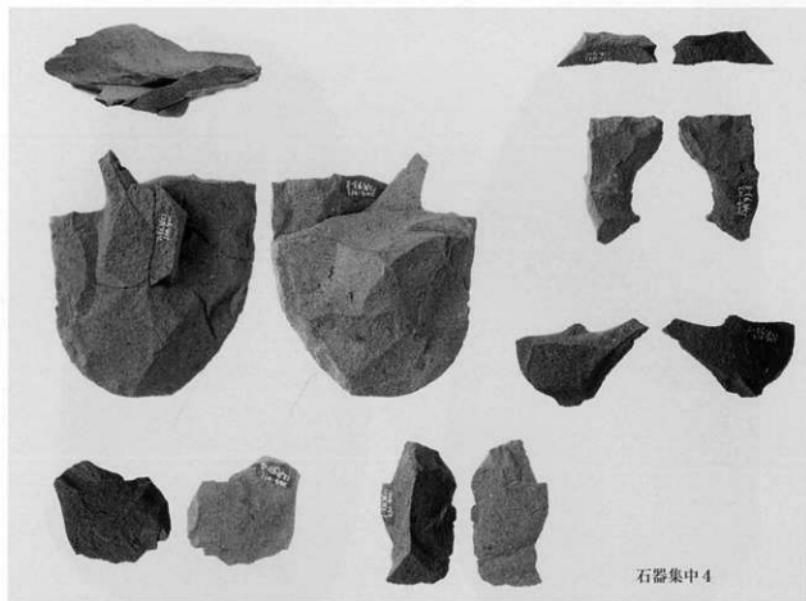


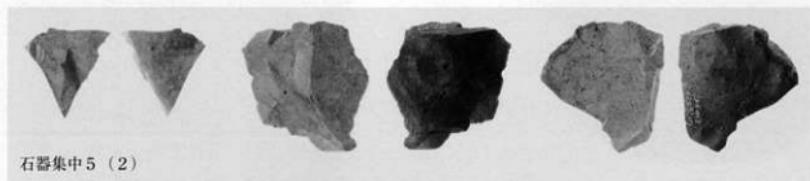
石器集中4遺物出土状況

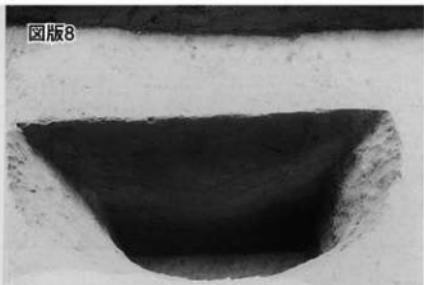


石器集中5遺物出土状況









SK001 (土層断面)



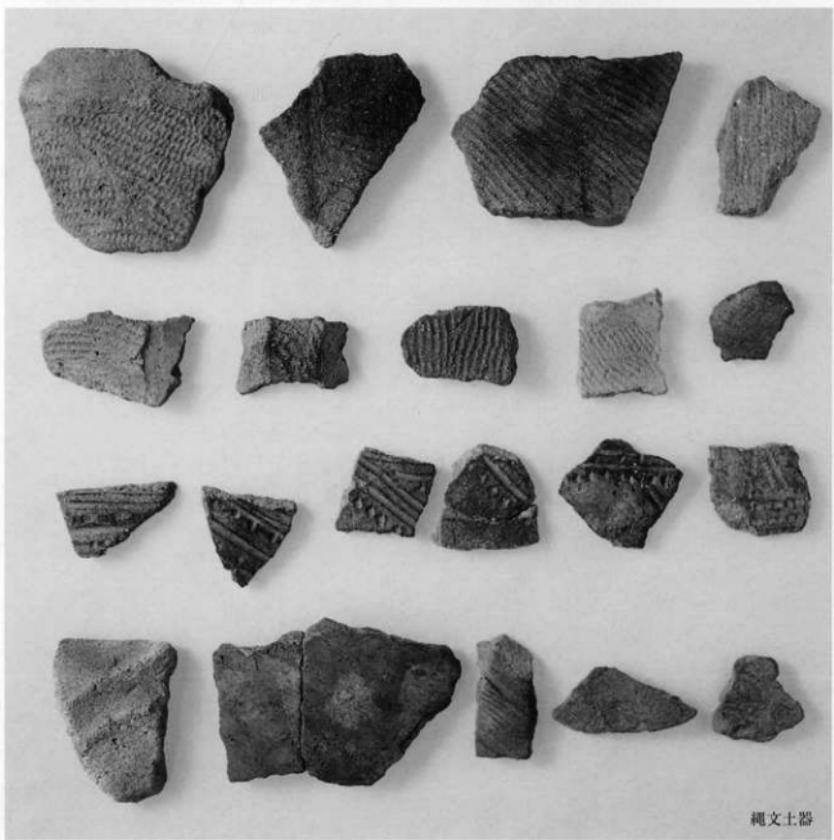
SK003



土製品(1)



土製品（2）



縄文土器

報告書抄録

千葉県教育振興財団調査報告書第611集

船橋市大仲台遺跡

—前原団地建替事業関連埋蔵文化財調査報告書3—

平成20年12月26日発行

編 集 財団法人 千葉県教育振興財団
文化財センター

発 行 独立行政法人 都市再生機構千葉地域支社
千葉市美浜区中瀬1-3

財団法人 千葉県教育振興財団
四街道市鹿設809番地の2

印 刷 株式会社 正文社
千葉市中央区都町1-10-6
